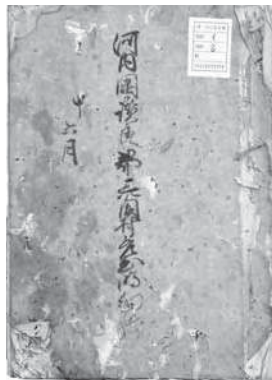


今年3月に教育委員会から、江戸時代に三箇村の庄屋であった「河合家」に伝来する古文書群の一部を翻刻・活字化した「河合家文書Ⅰ」が刊行されました。今月から3回にわたって、「河合家文書」に所収されている古文書を紹介します。

新田開発以前の三箇の様子を伝える貝原益軒の「南遊紀行」には、「池の広さ南北二里、東西一里、湖に似たり。其中に島あり。三ヶと云村有。」と、深野池は湖のように大きな池で、その中に島があり、島には「三ヶ」という村があったと、当時の様子を伝えていきます。

しかし、宝永元年（1704）の大和川付け替え工事と新田開発により、その姿は大きく変貌します。工事後に描かれたと思われる「三箇村図」を見ると、深野池が埋め立てられ、寝屋川・恩智川が整備されていることが分かります。また、三箇村が現在の三箇地区より範囲が広く、江戸時代には、北は現在の津の辺地区から三箇・住道駅周辺、南は榮和町・扇町・三洋町・朋来辺りまでが三箇村でした。

さらに、絵図だけでなく、文書からも江戸時代の三箇村の様子があがえます。その手掛かりとして、元文2年



明細帳

（1737）と元文5年（1740）に作成された三箇村の「明細帳」が

挙げられます。これらは、三箇村の代官が変わるごとに作成され、支配村の実状を把握するために、代官からの質問項目に答えるかたちで作成されたものです。そして、2つの史料を比較すると、元文5年分の方がより詳しくなっています。

「明細帳」には、三箇村の石高・田畑の面積だけでなく、村で作付している米の品種や麦や木綿などの種まきの時期、村内の寺院数、どのような職種の人物が何人居住しているかなど、三箇村に関する多くの情報

が書かれています。

この他にも、田畑の様子が描かれています。三箇村は水利状況が悪かったようで、田畑への水は寝屋川や恩智川から用水を引いていました。しかし、その水は悪水（作物の生育には悪い水）だったようです。さらに早が續くと川の水が干上がり、洪水になれば寝屋川や恩智川から田畑に水が流入していたようです。



三箇村図

と元文5年（1740）に作成された三箇村の「明細帳」が

「三箇村図」と元文5年分の「明細帳」は、9月15日から12月16日まで歴史民俗資料館で開催される「近世大東の村落——河合家文書」から見える三箇村——展で展示しています。（大東市立歴史民俗資料館）